

第 32 話 (18 頁) そりすべり

子どもたちが山でそりすべりをしていました。お百姓さんたちがやってきて、馬そり*に乗ると、ながえを上げて、山をすべりおりました。

じょうずにすべりおりましたが、山のおしまいでわきにそれ、雪のふきだまりにつっこみました。お百姓さんたちは雪にうもれてしまいました。

*馬そり…馬にひかせるそり

「これもとても短いし、何を伝えようとしたのか…と考えちゃうね。」

「こういう部類の、真意を計りかねる話が、いくつか前半に目立つ。」

「授業の息抜きになるように、こういうたわいのない話を挟んだのか。」

「お百姓たちはたまたま通りかかり、子どもたちのまねをしてみる気になったのだろうか。」

「馬そりは子ども用のそりよりずっと大きいだらうに、馬にひかせるための長柄をわざわざ引き上げて、馬もつけずに滑り始めた、というんだ。」

「馬付きだったら、雪の下り坂を行くときは、馬は恐る恐る歩くし、御者役のお百姓も注意して手綱をひくだらうに…。馬そりは下りの方が危ないというからね。」

「子どもたちがあまりに楽しそうなので、真似をして遊びたくなった、あるいは、子どもたちに手本を示したくなった。」

「うまく操っていたのに、山のふもとの、最後のところでかじ取りに失敗して雪のふきだまりに突っ込んだ。なかなか、うまくいかないものだ、という雰囲気は漂っている。」

「この馬そりって、お百姓さんたち、とあるし、みんな一緒に一台の馬そりに乗っていたんだらうね。」

「お百姓さんたちは雪に埋もれて、何を思ったのか…」

「見ていた子どもたちの反応だって、いろんな想像ができるよ。」